

# 2024 年度東京:すくわくプログラム

## ■■東京すくわくプログラムとは？■■

乳幼児の「伸びる・育つ(すくすく)」と「好奇心・探求心(わくわく)」を応援する幼保共通のプログラムです。探究活動による心の育ちで自己肯定感や思いやりなど非認知能力の育成が時代の変化の中で改めて注目されています。自己に関わる心の力—自尊心・自己肯定感・意欲・粘り強さ・社会性に関わる心の力—心の理解能力・共感・思いやり・協同性これらを日々の遊びの中で無意識に積み重ねながら成長しています。環境として本園はテーマ【自然】木としました。

### ■環境として本園はテーマ【自然】木。その中で教材カプラを導入しました。

個々の表現力、集中力、想像力を高め、自己表現のできる子どもを育てます。楽しく遊びながら、カプラの経験で培われる事は、3次元の空間認識力・数の概念・論理的思考・巧緻性・チームワークと社会性・チャレンジ精神など様々な力を自然に身につけていく事が出来ます。

### ■カプラ導入の様子

子ども達の会話の中で数が揃わない玩具、作ったら片づけられないとならないお約束の壁、先生の指導が先立つ遊び、友達との遊びに人数的に順番待ちになってしまうと声があがりました。そこで人数に制限なく見ることに楽しめるカプラをまずは 1 箱の準備からはじまりました。特に何も説明なく準備されたカプラに「これなあに？」「遊んでいいの？」とスタート。自由に遊びだした夏、カプラジャパンのインストラクターが夏に 5 箱貸し出しをもってきてくれました。3, 4, 5 歳児は自由に組み立てはじめ集中しインストラクターはポツン、ポツンと言葉を落としてくれるだけで子ども達の動きに変化が出ました。インストラクターの手先は魔法の様にタワーを作って行き子ども達は「すごい！」「え？！」と衝撃を受けた表情を見せました。数が足りなく待つことが必要だった今まで、量が足りずに他の玩具と合わせていた今までそれらがこの【カプラ】の存在で、変わりました。自由に遊んでいた 0.1. 2 歳児はそれらを何かな？と見ていたところから前進。4, 5 歳児は高さのある立体物を作っていました。それ以上に協力してくれる人を歓迎する姿が見えてきました。高さを意識していく姿、高さより広さを意識していく姿、椅子を使う事は 3 歳児には危険だと判断する 4, 5 歳児の会話は非認知能力の心の力がうずめいているのがわかります。そこには保育士が環境設定に回り、こうしてああしてといわない時間が生まれていました。子ども達も小さいなりにお兄さんお姉さんに渡す係に入れてもらっているわくわくの姿がありました。

自然と「ありがとう」「一緒にやりたい」「一緒にやらない？」「こっちでもう一つ同じのみに作ってみよう」暗黙の了解でチーム力が生まれ、言葉を交わさず息をのんで集中している姿もあります。

子どもが考えるという人工知能にはない、学びや遊びに夢中になる中で試行錯誤した意見や気づきが繰り返されて培われていくこの【探求】が実践される瞬間に何度も立ち合わせてもらいました。

乳児のクラスは組み立てる事より平面に絵を描くように繋げて遊び、崩れた音に笑い転げていき、いつの間にか集中して友達の作品は壊さなくなってきました。この音も心地良い音色です。

幼児のクラスも壊れた瞬間、誰かを責めることは見られません。残念がる姿はあります。しかし一緒に残念がるのです。気持ちの切り替えや共感が生まれているのでそれぞれが壊れてしまった経験を繰り返している。友だちの気持ちが痛いほどわかるということです。

いつの間にか、ブロックとは別の魅力でカプラを選ぶ姿が増えてきました。目標を決めて計画をしてからにしようとする子どもや、片づけなくて明日も続けられる場所だと提案する姿など指示待ちで動く姿はありません。

この木はどこにあるんだろうと話し声が聞こえてきました。森？林？公園？。図鑑を探し始めていました。

■今年度のすくわくプログラムを終えて

今年度はカプラが中心になっていますが、今後子どもの探究活動を深めて行かれる環境を続けていきたいと考えています。保護者会ですくわく事業について触れたクラスもありますが、保護者の皆様から「あれは何ですか？」と質問があり、保育者が説明することなくとも子ども達がワクワクして説明している姿もありました。いつか保護者の皆様にも参加できる日があるとたくさんの探究心が盛り込まれたすくわく活動を親子で共感できるのも素敵だと考えております。



こどもの「すくすく×わくわく」をおうえん



